

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第77号

平成30年11月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 明治維新の青写真を描いた男、横井小楠

### — 幕末の英傑たちに絶大な影響 —

#### 正成、正行そして水戸学を篤く信奉した小楠

10月例会は「横井小楠と正行」がテーマです。

小楠は、「国是三論」の中で「富国論」「強兵論」「土道論」をそれぞれ論じ、松平春嶽を通じて提出した「国是七条」は幕政改革の切り札と位置付けられ、福井藩には「国是十二条」を提出し、幕末期の福井藩の在り方について建策しました。

「横井小楠～維新の青写真を描いた男」(新潮社刊)の中で徳永洋は、これら小楠の主張・建策は、坂本龍馬の船中八策、由利公正の五か条のご誓文等に影響を及ぼし、小楠こそ「維新の青写真を描いた男」と呼ぶべき人物であった、と記しています。

ところで、横井小楠は、号を何故「小楠」と名乗ったのでしょうか。楠正行(小楠公)を慕ってのことは理解できるのですが、具体的な動機が知りたくていろいろと調べてみました。しかし、結果、何もわかりませんでした。

では、正行を慕った横井小楠についてご紹介します。

#### 天皇の下での議会政治＝共和一致を説く

文化6年1809～明治2年1869

幕末維新期の思想家・政治家。熊本藩士。藩校『時習館』に学び、藩命で江戸に游学。藤田東湖や川路聖謨(としあきら)らと交わり、帰国して実学党を結成、藩政改革を試みるが、藩内主流派の反撃を受け失敗。私塾「小楠堂」を開く。酒の失敗などもあり熊本藩では用いられず、二十余藩を遊歴。吉田松陰、橋本佐内らと交わり、福井藩の藩主・松平春嶽(慶永)に招かれ政治顧問となる。

万延元年1860、「国是三論」を著わし、開国通商・殖産興業による富国強兵を提唱。春嶽が幕府の政治総裁職に就くと、そのブレーンとして幕政改革や公武合体の推進に手腕を発揮した。後に失脚し、熊本での閑居を余儀なくされるが、その間も坂本龍馬らの訪問を受けるなど、多くの志士たちに影響を与えた。維新後には新政府の参与となるが、

共和制論者、キリスト教主義者と誤解され、明治2年1869、京都で暗殺された。

要は、「熊本では認められず、福井藩主・松平春嶽の参謀として公武合体推進期に活躍した開国論者」という事なのだが、小楠はその見識の高さと交友の広さで、勝海舟などの幕臣から薩長の討幕派に至るまで、幅広く影響を与えた。

小楠の主張は、「今の徳川幕府の政治は、徳川家ご一家の便利私営のための政治であるから、これを止めさせ、まず公武合体を実現して、更に諸大名、諸藩士の有能な人物を登用し、それを朝廷で統治する。政治は朝廷から出て日本国中共和一致の平和な国家にしなければならない」というもの。

ここでいう「共和一致」とは、いわゆる「共和制」ではなく、議会主義といった意味であり、平たく言えば『天皇の下に国家を統一し、人材を広く登用し、議会政治を実現する』というものであった。

#### 幕末の英傑たちがこそって評価

##### ○勝海舟

「俺は、今までに天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲(隆盛)とだ」

「横井の思想を、西郷の手で行われたら、もはやそれまでだと心配していたに、果たして西郷は出てきたわい」

##### ○西郷隆盛



横井小楠  
(安場保雅氏所蔵)

「小楠が諸国遊歴した際、人材であるといった人で、その後、名を挙げなかった者はいなかった。」

「一度この策（横井の策）を用いたら、いつまでも共和政治をやり通さなければならない」（大久保利通にあてた手紙の中で）

### ○坂本竜馬

「西郷や大久保たちがする芝居を見物されるとよいでしょう。大久保たちが行き詰ったりしたら、その時、ちょっと指示してやってください」

### ○吉田松陰

「先生の東遊の節は、是非萩に立ち寄って藩の君臣を指導してほしい」

### ○高杉晋作

「小楠を長州藩の学頭兼兵制相談役に招きたい」（久坂玄瑞に相談）

国是七条 → 国是十二条 → 薩摩・福井藩への提言 → 船中八

策（龍馬） → 新政府綱領八策（龍馬） → 新政について春嶽

に提言 → 五箇条のご誓文（公正）

このように、幕末維新の英傑たちが、こぞって小楠に一目置き、龍馬、松陰、高杉に至っては師と仰いでいたのである。

実際、龍馬が作成した有名な「船中八策」と「新政府綱領八策」は、小楠が幕府に提出した「国是七条」と福井藩に提出した「国是十二条」をそれぞれ下書きにしているし、また、由利公正が起草した「五か条のご誓文」にも、小楠の「国是十二条」の影響が色濃い。

華々しい”革命家”たちの陰に隠れて目立たないが、その構想力、影響力から言えば、小楠こそ、まさしく「維新の青写真を描いた男」と呼ぶべき人物だったのである。

## 湊川の洋上で「舟中雑詩」十首を作る

小楠は、実名は時在、通称平四郎、号は小楠。

号の由来は、楠正行、小楠公の人となりを慕ってつけたものである。

小楠が江戸遊学のため熊本を出発したのは天保10年1839、3月であった。

鶴崎から出船して、周防灘、播磨灘を過ぎて天保山より大坂に上陸するまでに、小楠は「舟中雑詩」十首を作っている。

その中に、兵庫の湊川を過ぎるときに読んだ、江戸初期に水戸藩の徳川光圀が建立した楠公の碑を拝する詩があった。この事から小楠が楠公や水戸学を厚く信奉していたことが伺い知ることができる。

### 国是三論

#### ①富国論

立派な政治を行っている西洋諸国が日本にやって来て、公共の道をもって日本の鎖国を開こうとするとき、日本が

なお鎖国を固守し続け、徳川ご一家や各大名一家のための私営の政治を求めて、「交易」の原理を知らないとすれば愚と云うべきである。

したがって天徳にのっとり、聖教に拠って、世界各国の実情を知り、大いに利用厚生之道を開き、国内の政治や教育を一新して、富国強兵の成果を上げ、外国の侮りを受けないように努力しなければならない。

#### ②強兵論

今日のように航海が大いに開けて、海外の諸国をも相手にしなければならない時勢では、孤島の日本を守るには海軍を強くするほかに道はない。

その軍制を定め国威を示せば、外国を恐れる必要がないだけでなく、機会を見て日本から海外諸国に渡航して、我が義勇をもって諸国の争いを仲裁してやれば、数年もたたないうちに諸外国が反って我が国の仁義の風を慕ってくるようになるだろう。

#### ③士道論

忠孝の道をつくそうとする天性を、特性に基づき道理に従って正しく導くのが文の道であり、その心を治め胆を練り、これを武術や政治で試してみるのが武の道である。

したがって、君臣共に文武の道を二つに分けずに文武の教えを政治組織によって実行していけば、本当の文武の治教を達成することが出来て、風俗は淳厚質実となり、人材もここから生まれるであろうことは疑いない。

### ●「国是七条」

春嶽が幕政改革の切り札として提出した小楠の建策（原文は漢文）

- ① 将軍は上洛して、朝廷にこれまでの無礼を詫げる
- ② 大名の参勤を止めて述職とする
- ③ 大名の妻を国元に帰す
- ④ 外様、譜代の区別なく有能な人物を登用する
- ⑤ 大いに言論の道を開いて天下とともに公共の政を行う
- ⑥ 海軍を起こし兵威を強くする
- ⑦ 相对（自由）貿易を止めて官貿易とする

### 「国是十二条」

慶応3年1867、正月11日起草。小楠が福井藩に提出した建策（原文は漢文）

- ① 天下の治乱に関わらず、一国（一藩）の独立を基となせ
- ② 天朝を尊び、幕府を敬え
- ③ 風俗を正せ
- ④ 賢才を挙げ、不肖を退けよ
- ⑤ 言路を開き、上下の情を通ぜよ
- ⑥ 学校を興せ
- ⑦ 士民をいつくしめ
- ⑧ 信賞必罰
- ⑨ 富国
- ⑩ 強兵
- ⑪ 列藩に親しめ
- ⑫ 外国と交われ

（文責『四條啜楠正行の会』代表 扇谷昭）